2023 年度第 1 回研究会（通算第 12 回）
開催日時：2023 年 6 月 3 日（土）
前半（公開講演会）：13 時 00 分～15 時 00 分
後半（非公開研究会）：15 時 10 分～18 時 00 分
場所：オンライン会議室
共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「使役交替・自他交替」というテーマのもとで、研究会を行った。
会の前半は、国立国語研究所研究系教授の Prashant Pardeshi 氏を招聘して、公開講演会を行った。こちらは、50 名の参加登録者を受け付けて、40 分の講演とそれに続く 30 分の質疑応答や意見交換を行った。
会の後半は、2 名のメンバー（青柳・小川）が、今日のテーマに関連する話題を 40 分で提供し、ディスカッサントおよび他の参加者の間で、30 分の質疑応答や意見交換を行った。小川の発表は、岳昱澎（Yue Yupeng)氏を第一著者とする共同発表である。
各講師の発表概要は以下のとおりである。

講師 1 （招聘講演）：Prashant Pardeshi（国立国語研究所）
タイトル：有対動詞の類型論：使役交替言語地図（WATP）から見えてくるもの（The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP): What it reveals about the typology of transnitity pairs?）
要旨：日本語を含む世界諸語において、「美容師が髪を乾かす」⇔「髪が乾く」のように、形態的に関連があり、（i）典型的に事態の変化およびその変化を引き起こす原因（使役者）の意味を含む動詞（使役動詞；causal verb）と（ii）事態の変化の意味のみを含む動詞（非使役動詞；non-causal verb）との対をなす動詞が多数見つかることが知られている（日本語の「開く：開ける」、「裂ける：裂く」、「始まる：始める」、「開く：開く」、など；以下有対動詞と呼ぶ）。言語類型論の分野では、有対動詞についての活発な議論が行われており、多言語データに基づいて行われた大規模類型論的な研究では以下の興味深い一般化が提案されている。

① 当該有対動詞の認知的な意味と派生の方向性に関する一般化（以下有対動詞の認知類型論的な一般化）（Haspelmath (1993)）

② 当該言語の地理的な位置と派生の方向性に関する一般化（以下有対動詞の地理類型論的な一般化）（Masica (1976)、Nichols et al. (2004)）

上記の一般化は、数名の限られた研究者によって行われた研究（データの収集・分析）の結果、導かれたものである。
　本発表では、国立国語研究所で開発された The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)を用いて、上記の２つの一般化の妥当性を検証した結果を示した。また、日本語の先行研究から、少数の有対動詞のデータに基づいて行われる大規模類型論的な研究が孕（はら）む問題点や見落としがちな落とし穴を明らかにした。

講師２：青柳宏（南山大学）
タイトル：日韓語の形態統語論と文法化に関するいくつかの覚書（Some Notes on Morphosyntax and Grammaticalization in Japanese and Korean）
要旨：一般に韓国語は日本語に比べて文法化の程度が低いといわれる。実際、除外型受身、授受動詞の補助動詞化、ツヅケル・オワル等のアスペクト補助動詞化などにおいて両言語には顕著な違いがみられる。本発表では、(i)なぜ韓国語では使役形態素が同時に受動形態素でもありうるのか、(ii)なぜ母音が/i/のものと/u/のもののうち、前者だけが受動形態素として振る舞いうるのかを検討した。(i)については、韓国語の受動文は使役文と同様の構造を持つが、外項を導入しうる Voice と VoiceP を選択する Cause がともに奪主題化(dethematize)されたからであり、(ii)については、そもそも外項を導入する述語（他動詞、非能格動詞）に下接しうるのは、母音が/i/の使役形態素のみであるからだと結論づけた。さらに、現代標準韓国語（ソウル方言）では基本的に一つの述語語幹には一つの使役形態素しか下接しないが、慶尚北道や済州島の方言をみると、単純使役形とともに二重使役形も観察され、前者では被使役者(causee)の動作主性が低く、後者では動作主性が高いという違いがみられる。そこで、これら周辺地域と同様にソウル方言にもかつては二重使役形が存在したが、“bundling”のような構造的縮約現象が起きたために、二重使役が折り畳まれるという史的変化を経た可能性を指摘した。

講師３：岳昱澎 /Yue Yupeng（東北大学）・小川芳樹（東北大学）
タイトル：構造的借用と語種制約、およびその緩和と構文化についての予備的研究～自他交替と接尾辞「さ」を中心に～（A preliminary study on the structural borrowing, (the loosening of) lexical strata, and constructionalization:

with special reference to causative-inchoative alternation and the nominalizating suffix *-sa* in Japanese）

要旨：日本語は、文字による記録が残る奈良時代以降、OV 語順であること、自他交替は他動詞化・自動詞化の接辞を用いて行うこと、名詞から動詞への転換は起きにくいことなどの形態統語的特性を保持してきているが、同時に、語幹が漢語や外来語である場合にのみ、和語の文法とは異なる漢語や外来語の文法的特徴が許される独特の構文を持つ。例えば、日本語は SOV 語順の言語だが、「上陸」「入学」などの漢語由来の熟語を大量に借用し、それをもとに、「卒業」「合格」などの和語独自の同様の VO 語順の語彙的構文を発達させている。また、日本語の自他交替は「壊す／壊れる」のような形態変化を伴うのが原則であるが、漢語由来の 2 字熟語（「展開」など）や英語由来のカタカナ語（「ストップ」など）の場合には、形態変化を伴わない自他交替を許す事例が圧倒的に多い（「～{が／を}展開する」「～{が／を}ストップする」など）。

本発表では、これらの事実を提示した上で、この事実を説明するために、奈良時代から鎌倉時代にかけて大量の漢語を語彙借用した際や、明治時代初頭に漢語や外来語を大量に語彙借用した際に、Thomason and Kaufman (1988)の借用の尺度の中で 2 番目に弱い「わずかに強い接触（slightly more intense contact）」による「わずかな構造的借用」も許し、かつ、これらの借用した構造に基づく構文化も起きつつあるという仮説を提示した。

第二に、和語・漢語・外来語という 3 つの異なる語種が混在する現代日本語の中でも、形態統語規則や音韻規則の適用の際に本来働いていた「語種制約」は、複合を除いては、厳然として維持されていることを示した。例えば、VO 語順の漢語構文や、形態変化を伴わない漢語的な動詞の自他交替が生産的に用いられる現代日本語においても、和語の基本語順が SVO に変化したり、和語の有対動詞が形態不変化の自他交替を起こすような変化は起きていない。

この 2 つの事実を踏まえて、本発表では、名詞化接尾辞「さ」の振る舞いを取り上げ、その選択特性の通時的変化のプロセスを明らかにした。具体的には、平安時代までは和語の形容詞にのみ接続するという「語種制約」と「品詞制約」が厳しく働いていたのが鎌倉時代以降緩まり、形容名詞に接続するようになるだけでなく、鎌倉時代と現代日本語では和語と漢語の選択特性が逆転するほどの変化を遂げていることを、CHJ と BCCWJ の調査結果として指摘した。その上で、この接尾辞「さ」については、今後、語種制約も品詞選択も消失し、英語の接尾辞-ness と同様、形容詞句すら選択できるようになる可能性があると論じた。